

住吉詣

ワキ 住吉神主

ツレ 惟光

ツレ 光源氏

ツレ 数人 従者

子方 童隨身

シテ 明石の上

ツレ 女 侍女

地は 摂津

季は 秋

ワキ詞

「是は摂州住吉の神主。菊園の何某にて候。さても此頃都に於て誉れならびなき光る源氏。さる宿願の子細あつて。当社御参詣と仰せ出だされ候ふ程に。社人どもを召し出だし社内をも清め。其心得をなすべき由申し付けばやと存じ候。

一同一声

「小車の。轅もつゞく都路の。直に治まる時代かな。

惟光

「そもく是はほまれ世に越え威光曇らぬ光る源氏にておはします。さても此君頼みをかけし。住吉

の神に所願を満てんと。

一同

「今日思ひ立つ旅衣。薄き日影も白鳥の。鳥羽の恋塚秋の山。過ぐればいとゞ都の月の。面影隔つる山崎や。関戸の宿も移り来ぬ。

下歌

「払はぬ塵の芥川。猪名の笹原分け過ぎて。

上歌

「見渡せば。薄霧まがふ其方より。く。ほの見えそむる村紅葉。これや交野に狩り暮れて。春見し花のそれならん。猶行先は渡辺や。大江の岸に寄

る波も。音立ちかへて住吉の。浦わになるも程ぞ
なき。く。

源氏

「聞きしに越えていよく有難き。神の誓ひも潔き。
浦わの波の瑞籬の。久しき御代を守り給へ。

地

「日の本の。神の誓ひはおしなべて。く。和光同
塵は。結縁の御始め。八相成道は利物の。果しな
きまで国富み。民を憐む御心を。誰かは仰がざる
べき。く。

ワキ詞

「唯今の御参詣めでたう候。

惟光

「さあらば祝詞を参らせられ候へ。

ワキ

「いでく祝詞を申さんと。神主御幣を捧げつゝ。

既に祝詞を申しけり。謹上再拝。敬つて白す神慮
をすゝしめの神樂。八人の八乙女五人の神樂男。
颯々の鈴の音。ていとうの鼓の声々に。うたふ榊
葉の神歌。幾久方の天地開闢。泰平諸人快樂。
福寿円満に守らしめ給へや。そもく立つる所の。

諸願成就皆令満足。有難や。

地

「来し方の。御願に猶もうち添へて。く。さも有

難き神慮の。納受もかくやと。感涙肝に銘じけり。

いよく／＼歡びの御盃。神主に給ひければ。折節御

供に。河原の大臣の御例とて。内より賜はれる。

童隨身其時に。御酌に立ちて慰めの。今様朗詠す。

子

「一樹の陰や一河の水。

地

「皆是他生の縁といふ。白拍子をぞかなでける。

（子方三段の舞）

子

「我見ても。久しくなりぬ住吉の。

地

「岸の姫松幾世へぬらん。

地

「千代万代の舞の袂。く。いよく／＼めぐる盃の。

有明になる沖つ舟の。ほの／＼明くる住吉の。浦

より遠の淡路島。あはれ果なき詠めかな。く。

シテ、ツレ一声

「明石潟。月まつ方に行く舟の。波しづかなる浦伝

ひ。

歌

「舟出せし。後の山の山おろし。く。関吹き越えて行く程に。須磨の浦わもいつしかに。跡の名残もおしてるや。難波入江に寄するなる。波はさながら白雪の。津守の浦に着きにけり。く。」

ツレ女

「松原の深緑なる木陰より。花紅葉を散らせる如くなる。色の衣々かずくに。のゝしりて詣づる人影は。いかなる人にて有るやらん。」

惟光

「是は都に光る君。過ぎにし須磨の御願はたしに。」

シテ

「あら恥かしや光る君と。聞くより胸うち騒ぎつゝ。いと心も上の空の。」

惟光

「月日こそあれ今日此頃。詣で来んとは。」

シテ

「白露の。」

地

「玉だすき。かけも離れぬ宿世とは。く。思ひながらも中々に。此有様を。よその見る目も恥かしや。さりとては浦波の。帰らば中空に。ならん

も憂しやよしさらば。難波の方に舟とめて。祓へ
だに白波の。入江に舟をさし寄する。

ロンギ地

「不思議やな。有りし明石の浦波の。立ちも帰らぬ
面影の。それかあらぬか舟影の。忍ぶもぢずり誰
やらん。

シテ

「誰ぞとは。よそに調べの中の緒の。其音たがはず
逢ひ見んの。頼めを早く住吉の。岸に生ふてふ草
ならん。

源氏

「忘草。く。生ふとだに聞く物ならば。其かね
言もあらじかし。

地

「実になほざりに頼め置く。其一言も今は早や。

源氏

「有りし契りの縁あらば。

地

「やがての逢ふ瀬も程あらじの。心は互に。変はら
ぬ影も盃の。度重なれば惟光も。

惟光

「めのと御酌をとりぐの。

地

「酔に引かるゝ戯れの舞。おもはゆながらも移舞。

(序の舞)

シテ「身をつくし。恋ふるしるしにこゝまでも。

地「めぐり逢ひける縁は深しな。

シテ「数ならで。何はの事もかひなきに。何身を尽し思ひそめけん。互の心を夕汐満ちきて。

地「入江の田鶴も声をしまぬ程。あはれなる折から。人目も包まず。逢ひ見まほしくは思へども。早漕ぎ離れて。行く袖の露けさも。昔に似たる旅衣。

田蓑の島も遠ざかるまゝに。名残も牛の車に召されて。上れば下るや稲舟の。舟影もほのぐと明石の浦わの。舟をし思ひの別れかな。